木村隆之先生　記念号によせて

大学の発展に大きく貢献された先生が、昨年に引き続き退職されます。昨年は御三人の先生方が退職されましたが、今年は木村隆之先生御一人ですが、その寂しさは昨年に勝るとも劣るものではありません。

木村隆之先生は、1946 年 11 月に岐阜県でお生まれになり、65 年 3 月岐阜県立岐阜高等学校を御卒業後、同年 4 月に京都大学経済学部に入学され、学部では山岡亮一教授のもとで農業経済論を御専門に学ばれました。大学院進学後は、主に岸本英太郎教授の研究室で社会政策を研究されていましたが、当時、まだお若かった中野一新先生の手解きも受けられたそうです。当時の学会をリードされた先生方の薫陶を受けられた京都大学を御卒業後は島根大学文理学部、法文学部で 17 年間にわたって教鞭をとられています。

島根大学時代には、雇用政策、労働問題に関する多くの研究業績を残されていますが、1992 年 4 月に本学経済学部に経済政策担当の教授として着任されました。恐らく、御両親のお世話をされることを考えられ、生まれ故郷の岐阜にお戻りになったのではないか、と推察されます。その後、退職された堤達朗教授が担当されていた労働経済論も受けもたれました。

木村先生には、島根大学時代をつうじて、多くの研究業績がおありになりますが、その問題意識は戦後日本労働市場の構造を論理的かつ実証的に解明するということで終始一貫されています。よって、研究論文も、①労働市場の階層的構造、②相対的過剰人口の現代的形態、③日本労働市場の構造とその実証研究に分類されます。これらの研究をつうじて、労働市場の複合的・階層的構造、相対的過剰人口の意義、農村で展開されている地域労働市場の性格などについて、示唆に富む知見を提起され、研究成果は高い評価を受けておられます。

現在は、失業対策、「潜在的失業」対策、労働力不足対策、積極的労働力対策、減量・構造調整政策、規制緩和・弾力化政策という形で展開されてきた戦後労働（市場）政策を歴史的に総括する研究に取り組んでおられます。

木村先生は、教育にも熱心に取り組んでおられ、講義時に配布されるレジュメ、そして映像を通して提供される経済事象や経済統計データは、学生たちにも大変好評です。先生のこうした御努力は、出来合いの知識を教授するのではなく、学生自らが現実の経済・労働問題を敏感にとらえ、その解決策を学生自身に考えさせることを重視されてきたからこそです。

本学経済学部には、地域に貢献する企業で活躍することをめざす人材を育成することを目的に、アドバンスコースとして「企業人育成課程」が設けられています。この課程は、本学の理事・評議員を務めていただいている地元大垣市の有力企業イビデン・大垣共立銀行・西濃運輸などからなる協力企業 17

社から、講師を派遣していただくものです。この課程で学ぶ者のうち、成績優秀者は、協力企業への就職活動に際しては、学長特別推薦が受けられます。木村先生は、このコースの地域企業研究演習も担当されており、履修生の就職についても親身に相談にのっておられました。また、若く経験の浅い他の担当者たちにとっても良き相談相手でした。先生御自身は御存知ないと思いますが、「キムキム」という愛称で親しまれ、頼りにされておられたそうです。

学内行政においては、教務部長、学内選出理事、そして経済学部長を 2 期務められ、教授会では、真面目な性格よろしく細部にまで行き届いた運営をされていたのが印象的です。地方私立大学のおかれた厳しい状況の中で、ただ黙って困難な学内行政をこなしておられた先生のお姿が、今も目に焼き付いています。また、岐阜県、岐阜市、大垣市の多くの審議会の委員を引き受けられ、地域にも多大の貢献をなさっています。

木村先生といえば、私が思い浮かべるのは、先生のお車にはいつもキャンプ道具一式が積み込まれていたことです。島根大学時代には、このお車で大山などにスキーを楽しみに行かれていたのでは、と勝手な想像もしていました。そのためか、先生はこのお車を駆って遠方の高校巡回も快くお引き受けになっておられました。

教育・研究は素より、学内外の多くの役職委員を務められ、本学の発展に多大の功績を残された木村隆之先生が、本年をもって大学を去られることは、公私ともに親しくお付き合いをさせていただいていた私にとっても大変淋しい限りです。

今後とも後進への御指導御鞭撻を賜るようお願い申し上げますとともに、木村隆之先生の益々の御健勝と御活躍を祈念し、献辞とさせていただきます。

岐阜経済大学学長
岐阜経済大学学会会長　石　原　健　一